

公益財団法人 日本財団 御中

一般社団法人 御代田の根
2023年度 運営事業 活動報告書

2024.4.12

■はじめに

御代田の根は、2021年度 コミュニティモデル型の子ども第三の居場所事業の助成を受け、子どもと大人が一緒になって身近に触れられる自然を感じ、自然の恵みを暮らしに役立てながら生きることが持続可能なコミュニティにつながるとの考えを中心に据えて「みよたの広場」の開設・運営事業を進めてきた。

誰かの手によって完成され、提供される広場ではなく、かかわる人たちでつくり続け、改善しながら使っていく広場にすることを念頭に置き、次の3点を掲げて場づくりを行なっている。

- 広場が子どもも大人も過ごせる居場所となること
- よい循環を生み出す拠点となること
- 新たな関係を結びなおす場となること

FY2022は上記3点のコンセプトの体現に力を入れてきたが、FY2023は助成の最終年度に向けて、「住民主体で運営される広場」を目指して、主体的に運営に関わってくれる住民との関係性づくりにも力を入れてきた。本活動報告書では、それらの実現に向けた活動実績とここまでの成果を報告する。

■活動実績と成果

①子ども第三の居場所拠点「みよたの広場」の運営実績(数字)

広場の利用人数の合計と平均は以下の表の通りで、一年間で約5600名の方々に利用いただくことができた(児童数だけでなく平日/週末の親御さんの数もカウント。イベント開催日の参加人数も含む)

■FY2023 利用者集計

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	Total
合計	504	477	485	608	496	752	692	604	377	232	210	206	5,643
平均	24.0	26.5	28.5	27.6	24.8	31.3	30.1	33.6	19.8	17.8	17.5	12.1	24.5

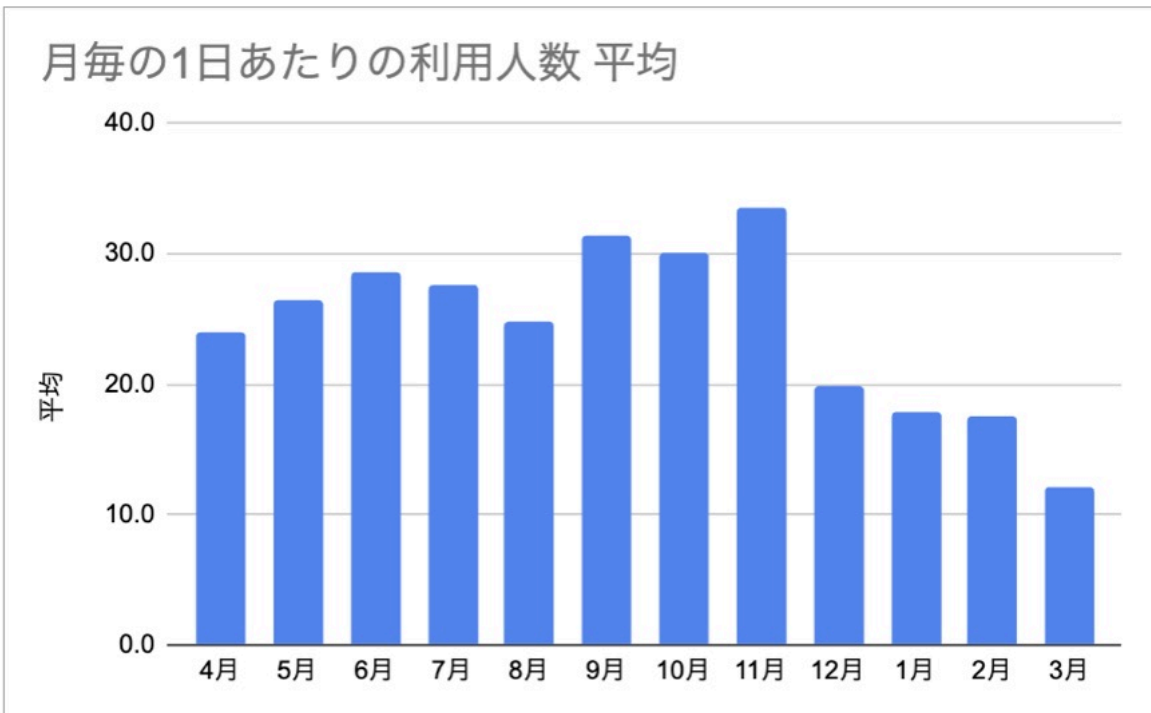
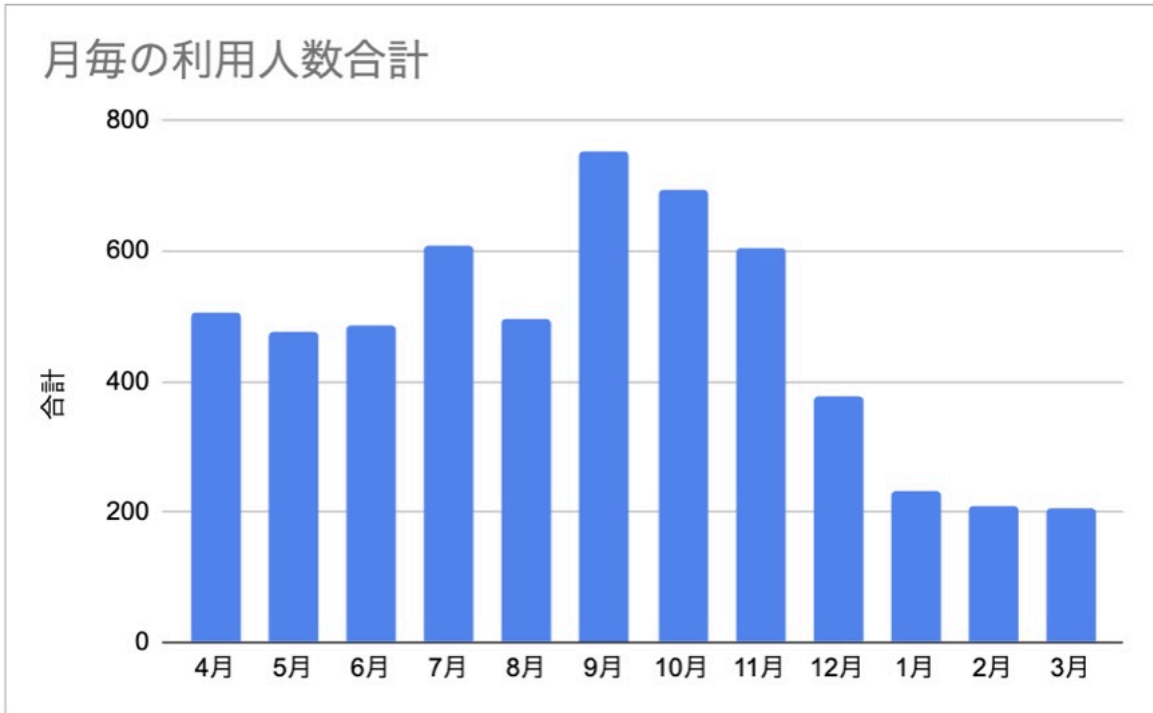
■FY2022 利用者集計

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	Total
合計	380	234	89	122	196	358	415	1794
平均	15.8	11.7	8.9	10.2	24.5	17.9	23.1	16.0

利用人数合計を見ると、昨年と比べ大きく利用人数が増えていることが確認できる。平均人数も増加しており、より多くの方に利用していただける拠点になっていることがわかる。

月別利用人数合計は、昨年同様に、寒さと共に利用人数が減り、暖かくなるにつれて利用者が増えている。続いて、月毎の1日あたりの利用人数平均を見ると、寒さの厳しくなる12月以降、大きく利用人数が減る傾向になっている。昨年の実績を踏まえ、薪棚による風防の設置、半屋外のテントスペースの設置など、冬場の寒い時期でも利用してもらえるような対策を講じてきたが、寒い時期の利用人数を大幅に増やすことはできなかった。

寒い冬だからこそ体験できる企画など、わざわざ寒い外に出かけようと思ってもらえるようなイベントを仕込み、季節によらず広場を利用してもらえる状況を作りたい。



月毎の利用人数合計・平均グラフ

月別の利用人数合計

	児童数								大人							合計
	小学生未満	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学生以上	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上		
4月	126	30	28	26	19	27	7	3	23	66	97	25	24	3	504	
5月	69	44	33	26	25	62	10	6	7	57	110	7	11	10	477	
6月	72	38	23	17	17	66	30	5	7	58	98	33	2	19	485	
7月	81	29	30	22	26	67	90	23	23	69	103	23	19	3	608	
8月	48	24	26	25	21	38	33	18	32	89	67	53	22	4	496	
9月	103	37	38	35	28	45	67	42	39	133	128	34	16	7	752	
10月	125	19	19	17	24	36	66	43	29	105	144	31	27	7	692	
11月	71	28	20	13	24	42	50	35	36	114	125	26	10	10	604	
12月	42	21	22	13	28	24	48	20	9	55	75	7	10	3	377	
1月	20	19	19	19	23	16	9	22	5	34	36	3	7	0	232	
2月	23	15	14	10	14	26	8	17	8	32	29	8	6	0	210	
3月	7	20	20	11	12	11	8	19	8	45	29	8	7	1	206	

月別の利用人数平均

	児童数								大人							合計
	小学生未満	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学生以上	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上		
4月	6.0	1.4	1.3	1.2	0.9	1.3	0.3	0.1	1.1	3.1	4.6	1.2	1.1	0.1	24.0	
5月	3.8	2.4	1.8	1.4	1.4	3.4	0.6	0.3	0.4	3.2	6.1	0.4	0.6	0.6	26.5	
6月	4.2	2.2	1.4	1.0	1.0	3.9	1.8	0.3	0.4	3.4	5.8	1.9	0.1	1.1	28.5	
7月	3.7	1.3	1.4	1.0	1.2	3.0	4.1	1.0	1.0	3.1	4.7	1.0	0.9	0.1	27.6	
8月	2.4	1.2	1.3	1.3	1.1	1.9	1.7	0.9	1.6	4.5	3.4	2.7	1.1	0.2	24.8	
9月	4.3	1.5	1.6	1.5	1.2	1.9	2.8	1.8	1.6	5.5	5.3	1.4	0.7	0.3	31.3	
10月	5.4	0.8	0.8	0.7	1.0	1.6	2.9	1.9	1.3	4.6	6.3	1.3	1.2	0.3	30.1	
11月	3.9	1.6	1.1	0.7	1.3	2.3	2.8	1.9	2.0	6.3	6.9	1.4	0.6	0.6	33.6	
12月	2.2	1.1	1.2	0.7	1.5	1.3	2.5	1.1	0.5	2.9	3.9	0.4	0.5	0.2	19.8	
1月	1.5	1.5	1.5	1.5	1.8	1.2	0.7	1.7	0.4	2.6	2.8	0.2	0.5	0.0	17.8	
2月	1.9	1.3	1.2	0.8	1.2	2.2	0.7	1.4	0.7	2.7	2.4	0.7	0.5	0.0	17.5	
3月	0.4	1.2	1.2	0.6	0.7	0.6	0.5	1.1	0.5	2.6	1.7	0.5	0.4	0.1	12.1	

FY2023 月別の利用人数 年齢別データ

②日々の運営の様子

イベントがない平日の運営では、子どもたちが焚き火を楽しんだり、自然資源を活用したDIY(秘密基地づくり・工作)をするなど、拠点の特徴を生かした環境体験を楽しんで過ごしている。また、子どもたちの遊びの延長で、積み木に見立てた薪積みや競い合ってゴミを拾うゴミ拾い競争、水遊びのついでに草木への散水など、広場の維持メンテナンスにも関わってもらっている。



子どもたちが作った秘密基地



子どもたちと定期的に行うゴミ拾い競争

②イベント・ワークショップの実施

○みよたの日曜市(マルシェ)

広場をより多くの人に認知してもらうためのイベント。初めての方が、広場の存在やコンセプトを理解・体感するきっかけになっている。また、子どもたち自身が音楽隊の演奏に参加したり、自らがお店を企画して出店するなど、子どもたちの実践的な学びの機会になっている。



子ども出店の内容をまとめたメモ(子どもがiPadを使って構想をまとめている)
考える視点をアドバイスするなど出店内容の検討の伴走をしている

○ちいさいひろば

保育士の資格を持っているスタッフに企画してもらい、週1回実施している自主保育の企画（親子が集まり、一緒に遊び、一緒にご飯を食べる）。広場にある自然を生かした自然体験や家ではなかなかやらせられない水遊び・泥遊び、後片付けが気になってやらせられない料理のお手伝いなど、未就学の子どもたちの体験機会を提供できる時間になっている。同世代の子どもを抱える親同士が知り合い、関係性を育む場・子育ての相談をし合う場にもなっており、子育て世代の親の孤立を防ぐ役割にもなっている。



○カレーの日

毎月1回、集まった子どもと大人でカレーをつくり、一緒に食べる企画。いただいたお米や野菜などを中心に利用し、子どもは無料としている(子ども食堂としても機能)。カレーもご飯も焚き火で調理するため、アウトドアな経験の機会にもなっている。定期的を開催することで、この場を通じたゆるやかな関係性も生まれ始めている。

また、「みんなで作って、みんなで食べる」という運営方法にすることで、広場の利用者と運営者の境が曖昧になり、広場運営に主体的に参加してくれる住民を育てる場にもなっている。



③住民を巻き込んだ運営体制

○オープンミーティング

広場の今後のあり方を検討するミーティング。広場の継続に関心を持ってくださる方々が集まり、毎月1回、様々なトピックについてミーティングを行っている。年間計画(どの時期に、どのようなイベントをすべきか)、予算の使い方、運営のあり方など、コアとなる議論を定期的に行うことで、運営主体となる住民コミュニティが少しずつ育まれている。



○現場運営の仕組み

広場に来た人に「遊び」として薪割りを体験してもらおうありがとうの薪(子どもは焚き付け用の小さい薪割り)、薪運びが楽しくなる電動バイクでの薪運び、手伝って欲しいことリスト掲示板など、ツールや仕組みを開発・実装している。これにより、スタッフがいない時間にも、広場の維持メンテナンスを遊びとしてやってくれる方が増え、管理コストを軽減できている。

また、SNSなどでの情報発信でも、現場管理を住民主体でやっていきたい意志を発信することで、手を差し伸べてくれる方が増えた。



ありがとうの薪(来た人に薪を割ってもらう仕組み)
薪を割った本数を掲示板に書いてもらうことで、常に人の気配を感じられる



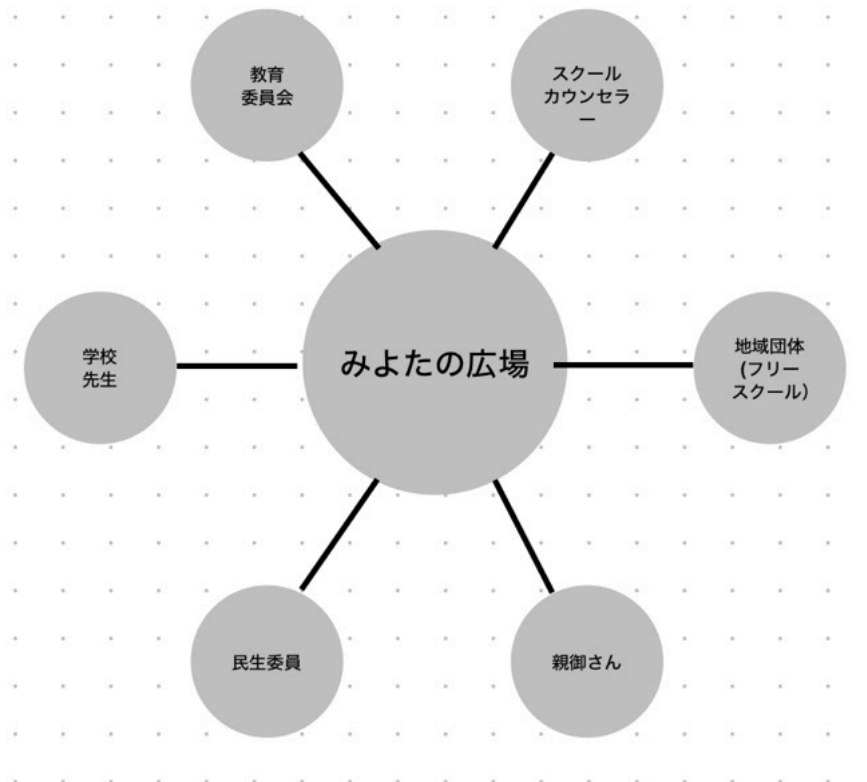
電動式の薪運びバイク

④課題を抱える子どもたちのケア

○課題を抱える子どもたちを地域で支える体制

教育委員会、学校の先生、民生委員、スクールカウンセラー、親御さん、地域の別団体(フリースクールを運営されている拠点含む)との連携により、子どもたちの抱える課題によって柔軟に対応できる体制が整えられた。

学校には行っていないが、拠点に遊びに来ている子の情報を学校の先生や民生委員の方に共有したり、移住したばかりで登校拒否になってしまった子ども抱える親御さんにフリースクールの情報提供をして繋ぐなど、すでに具体的な連携をはじめられている。今後も連携の選択肢を増やし、多様なニーズに対応できる体制を強化していく。



■総括

日々の運営はもちろんのこと、マルシェやカレーの日、オープンミーティングなどの定期的なイベントによって、地域の様々な人がつながる場として機能を強化できた一年だった。1年後の運営自走に向けて、子どもたちを巻き込みながらの現場運営、主体的な住民を巻き込んでのオープンミーティングなど、運営のあり方も徐々にアップデートできている手応えを感じられた。まだまだ事例は少ないものの、第三の居場所として、課題を抱える子どもたちの受け皿としても、地域で子どもたちを支えるハブとしても、機能し始めていることも今年一年の成果と言える。

一方、経済的な自立に向けてはまだまだ課題が山積している状況である。寄付制度の認知拡大やカフェ運営による収入増、土地賃料の減免に向けた動きなど、さまざまなアプローチを同時進行で動かしていく必要がある。そのプロセスも住民たちにオープンにし、協力を仰ぎながら進めることで、1年後の運営自走に向けてより多くの住民と共に拠点を運営していける形を目指したい。